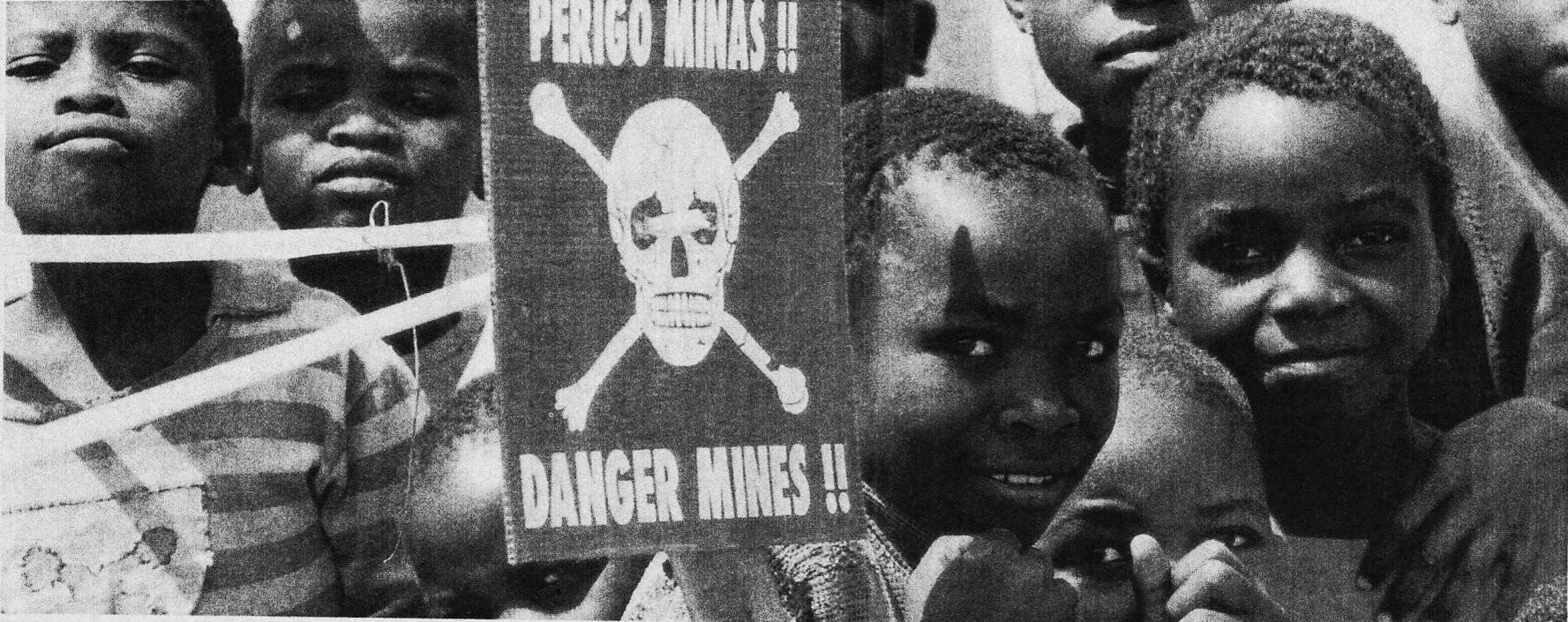


# の国 1500万個のドクロ



アンゴラ東部の都市ルエナから大西洋まで鐵路が延びている。しかし、列車は1985年から走っていない。始発駅だったルエナ駅は今、ルエナ戦争難民キャンプに姿を消している。

難民約500人。93年2月、2週間にもわたる激戦がこの街で展開された。自然にキャンプは生まれた。かつてのホームには難民が露店を出し、細々と生活している。旧駅舎の雨漏りのする屋根の下、赤ん坊を抱きながらロジエロネタさん30は座っていた。右胸はひざから先がなかった。ルエナの街を歩いてきた。歩道がなくなったとほろりほろりと話す。年齢を聞き「30歳だ」と答えて返ってきた時、「本当か」と疑った。ロジエロさんの顔には深いしわが刻まれ、老人のように見えた。ロジエロさんは以前、アンゴラ最東部のカゾンボという町で農家をしていた。83年内戦から逃れようと300人以上を歩き、ルエナにきた。そして、地雷、しわの一本一本はロジエロさんの苦しみだった。

赤ん坊は生後10日という三男のエステバンちゃん。目はきよきよと、やせ細っていた。素人目でも来発失調だとわかる。「腹を売って暮らしている。この子を含めて男の子が3人いる」。ロジエロさんの生きる苦しみは続いている。

「また、カゾンボの畑に戻りたい。今すぐにも戻りたい。でも、もう歩いて帰ることも難しくなった。夫のつづきを聞いた妻クリスティアーナさん(28)は「希望を持ってこんな暮らしでも、お願ひだから」と励まされた。ロジエロさんは声を聞き、目を閉じた。エステバンちゃんの細い腕が伸び、父親の顔をこっと触った。

## 「希望を持って」妻は言う



雨や風が吹き込む廃駅のホームも難民にとっては「安住の地」だ。アンゴラ・ルエナで

◆地雷被害の深刻な主な国々◆ (1997年1月 ICRC調べ)

国名	人口(万人)	地雷埋設数(万個)	四肢切断者数(人)	四肢切断者率
【アフリカ】				
アンゴラ	1002	1500	30000	334人に1人
コンゴ	1690	300	7000	2414人に1人
モザンビーク	854	100		
ソマリア	2725	100	5000	5450人に1人
【アジア】				
アフガニスタン	2210	1000	35000	631人に1人
カンボジア	960	800~	25000	384人に1人
ラオス	7090	350	60000	1182人に1人
【ヨーロッパ】				
【ユーニア・エゴピナ】	440	300~		
ボスニア・ヘルツェゴビナ	480	300		
【中東】				
イラク	1975	1000	20000	987人に1人

ICRC (赤十字国際委員会)の調査によると、現在、71カ国に1900万発以上の地雷が埋まっている。毎月8000人が死に、1200人が負傷する。20分に1人がどこかで地雷の被害に遭っている。地雷は、対戦車用の二つがあるが、安価な対人地雷の方が使用頻度が高い。地雷は埋められ、自衛隊が購入しているが、半永久的に爆発の可能性を輸出はしていない。

ICRC (赤十字国際委員会)の調査によると、現在、71カ国に1900万発以上の地雷が埋まっている。毎月8000人が死に、1200人が負傷する。20分に1人がどこかで地雷の被害に遭っている。地雷は、対戦車用の二つがあるが、安価な対人地雷の方が使用頻度が高い。地雷は埋められ、自衛隊が購入しているが、半永久的に爆発の可能性を輸出はしていない。

## こんな暮らしでも……

**AAR**  
ザンビアのメバ難民居住区で活動する日本の国際NGO「難民を助ける会」(AAR)は1984年から、難民の自立を促進するための活動を続けている。大工屋、成所ワリヤカ1製作、金属加工工場、ロジエロネタを展開している。ロジエロネタのある地区では、JICAが敷設した水道で体を洗う子どもたちがいた。4カ所だけ井戸で水道を敷設したが、まだ足りない。水道のない地区では、寄生虫で汚染された井戸しかない。住人たちは毎朝、9時から11時、水を汲みに行き、それを理髪店を営むアマンダ・デビズさん43は、飲み水すら確保するのは大変なのに、客の頭を洗うことに「感謝」と話した。

医療援助も重要。マリリア、寄生医科に加え、国民の3割がエイズ感染率といわれる。JICAがサピア事務所長の石川満男所長は「時間がかかるでしょうが、自力で立ち上がる力を身につけてもらうようにしたい」と語った。地道な活動は今後も続く。

## 3割がエイズ感染者 ザンビア国民

**JICA**  
アンゴラ難民のほか、コンゴ民主共和国(旧ザンザール)などの難民計3100万人が生活するザンビア。JICA(国際協力事業団)は1970年から、さまざまなプロジェクトを展開している。ロジエロネタのある地区では、JICAが敷設した水道で体を洗う子どもたちがいた。4カ所だけ井戸で水道を敷設したが、まだ足りない。水道のない地区では、寄生虫で汚染された井戸しかない。住人たちは毎朝、9時から11時、水を汲みに行き、それを理髪店を営むアマンダ・デビズさん43は、飲み水すら確保するのは大変なのに、客の頭を洗うことに「感謝」と話した。

医療援助も重要。マリリア、寄生医科に加え、国民の3割がエイズ感染率といわれる。JICAがサピア事務所長の石川満男所長は「時間がかかるでしょうが、自力で立ち上がる力を身につけてもらうようにしたい」と語った。地道な活動は今後も続く。

**AMDA**  
日本の国際医療NGOとして、アンゴラで1995年8月から活動開始したAMDA(アジア医師連絡協議会)アンゴラ、首都ルエナの事務所では杉本恵太さん(28)が職員9人を束ねている。UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)と協力し、現在、ウジの近くの都市サンサボ、ボで36床の病院運営を続ける。病院長スタッフは18人。現地採用のボで運営指導をするほか、ルエナでUNHCRやアンゴラ政府との交渉にも参加している。患者は気候の変わり目には約3000人に膨れる。約50%を歩いて来る患者もいる。サンサボは農産物で知られる。漁業が中心の町。役人が「救急車を政府に渡せ」と平然と杉本さんに要求する場面もあった。活動を地元で定着させること(並大抵のことではない)か、きつ定着する。この国の人もみんな同じ人間ですから」と首を見つめた。

編集・レイアウト 嶋神 大平

## 救援金募集

内戦、地雷被害などに苦しむ難民への救援金は、左記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。  
〒530-8251 大阪市北区梅田3-4-5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・009701912891)